

探訪 北の風景 31

ノツカマフチャシ跡 根室市・根室半島チャシ跡群

青木和弘

岬の先端や海岸段丘の上に設けられている。塚を巡らしているが、実際にどのような建造物が建てられていたのかは分かっていない。砦だけではなく、祭祀を行う聖地や談判の場など、さまざまな用途があったとも言われる。

チャシは根室市内に32カ所あり、そのうち24カ所がこの史跡に指定されている。「アイヌ文化期（13～19世紀）の砦の跡である」と現地解説文にあるが、16～18世紀に造営されたという説もある。道内にはチャシ跡が700カ所ほどあるらしいが、特に根室半島に集中しているという。それだけ重要拠点であり、外敵との遭遇機会が多い場所だったのだろう。

根室半島は深い霧に包まれていた。ノツカマフ1号、2号チャシ跡は、半島のオホーツク海側、根室市街地から10キロほど東側のノツカマフ岬にある。道道35号沿いの、海側に入口があり、駐車場から、黄色や紫の花の咲く草地の踏み跡をたどると、案内板がある。国指定の史跡「根室半島チャシ跡群」の一つで、ここは悲劇の土地でもある。

この日は霧に阻まれ景色は見渡せなかった。1号チャシは半円形を連ねた幅5メートルほどの塚で、深さは2メートル以上あるというが、門外漢の私には、一見、草地の窪みのようにだ。チャシは砦のことで、根室では、見晴らしの良

根室には、これより古い遺跡もある。国道44号で根室市街に入る手前の「西月ヶ丘遺跡」だ。標高20～30メートルの台地に、大小350基ほどの堅穴跡が密集している。方形や長方形の堅穴は、約800年前の擦文時代（7～13世紀）後半のものと考えられ、続くアイヌ文化期との関わりが考古学上注目されているという。グーグル地図で検索し、航空写真を拡大してみると、小さな窪みがたくさん見て取れる。

根室チャシ群跡の話にもどるが、それだけ多くの人々の暮らしがここにあったのだが、当時、どれだけの人口があったのかは分からないという。和人とアイヌの戦いは古代からあり「蝦夷征伐（え

案内板の地図を見るとチャシ跡はオホーツク海側に多くあるのが分かる



みしせいとう」として歴史に残るが、根室では、1789年（寛政元年）の「クナシリ・メナシの戦い」を避けて通れない。

松前藩の「新羅之記録」（1615～1621年ごろ）に、メナシ地方（現在の根室管内）のアイヌが100

隻近い船で鷲の羽根やラッコの毛皮などを積んで松前に行き、交易をしたという記録がある。1754年から地域を経営する松前藩の役人などがノツカマフに住むようになり、1778年にはロシアの商人も訪れている。ここが当時、東蝦夷の中心地だったのだ。そして事件は起きる。1788年、交易を請け負っていた飛騨屋が、魚のメ粕の肥料作りでアイヌを雇うようになったが、労働環境に不満を持ったクナシリのアイヌ41人が蜂起、メナシのアイヌ89人も同調し、商人や商船を襲い、和人71人が犠牲になった。

松前藩が鎮圧して、蜂起者たちは投降し、首謀者ら37人が、当時、藩事務所である運上屋が置かれていたノツカマフで処刑され、ノツカマフ岬付近に埋葬された。そのため、この地をアイヌ





根室半島チャシ跡群の一つ、ノツカマフ1号チャシ跡。半円形を連ねた幅5メートルほどの壕で、深さは2メートル以上あるというが、門外漢の私には、一見、草地の窪みのように見えた



ノツカマフ岬の側にあるノツカマフ1号チャシ跡。近くに「クナシリ・メナシの戦い」で処刑されたアイヌたちが埋葬されているが、確かな場所は分からない。草原には黄色や紫の花がたくさん咲いていた

私たちは嫌い、翌年、藩の運上屋は現在の根室市街地に移転し、そこが新しい中心地として発展したという。

1974年から毎年9月にアイヌと和人、双方の犠牲者の供養のため。アイヌの人たちが中心になって「ノツカマフイチャルパ」という供養祭が行われている。

「根室半島チャシ跡群」は、財団法人日本城郭協会が2006年に選定した「日本100名城」に、北海道から五稜郭や松前城と共に選ばれている。

* * *

訂正 先月号20ページ1段目11行目。「増毛の3駅」を「増毛など8駅」に訂正し、お詫び申し上げます。